婦人の目

子どもへの贈物

藤屋紀子

昨年はサル年にちなんで、私たちの家庭では、「神の木に登ろう」という目標をたてた。そして、わが家でキリストを見るために木に登ったのがだれだったのか、よくわからない。けれど、一つだけ確かなことは、私たちの家庭にもキリストがいらしてくださったという事実である。

私たち夫婦は昨年、長崎と桐生に出かけ、〝マリッジ・エンカウンター〟を体験してきた。それはもう、大きな喜びと感動と、ある種の重さとを伴って、今、改めて結婚の秘跡を生き続けるという希望に圧倒されている。

結婚したという事実と、子どもが生まれたという事実を前に、キリストの「神が合わされたもの、人はこれを解くことはできない」という温かい声が響いてくる。

キリストを見るために木に登ったザアカイの対話の場面を読む時、いつも感動するのは、ザアカイの言葉が家庭の中で、そしてふだん家族の中で発せられたのではないかと私は考えるからである。

キリストが失われたものを探して歩かれる時、そこにはいつも、新しい力、新しい関係が再生され、赦しとは一つの結びつきを復興しているような気がする。失われていた者との関係が回復されるということではないだろうか。

「愛」が人に達する時、人は変化していくということをザアカイに見つけることができる。キリストはザアカイに生命を与え、その温かい受け入れによって、さらに再び生命を与えた。私たちの家庭にも、このような関係がいつも流れていれば、どんなにすばらしいことだろう。三位一体の神の愛の家族への関係は、案外、こんな日常の小さな出来ごとの中に、フッと顔をのぞかせるのではないかしら。

クリスマスの日の子どもたちへのプレゼントは、「お父さんは、本当に心からお母さんを愛している。お母さんは本当に心からお父さんを愛している」と彼らがその目で見てくれることだと確信し、その消えることのないキリストのもたらされた愛の火に、私たちの家庭も点火された思いがする。

（主婦）